

## 考古学者の書棚

## 「板付—市営住宅建設に伴う発掘調査報告書 1971～1974」

福岡市教育委員会

小山 岳夫

標記の発掘調査報告書は、昭和54（1978）年、19歳の私が拙くも弥生時代研究を志した初期に購入した書籍である。

当時（今でもそうなのだろうが…）、神田神保町の慶文堂書店には考古学研究者垂涎の有名遺跡の発掘調査報告書等がたくさん陳列されていた。板付遺跡、瓜郷遺跡、日本農耕文化の生成など弥生時代研究を志す者なら誰でも欲しがる書籍が取り揃えられていた。

極めて漠然と水稻耕作の始まりに興味を持っていた私にとって、九州北部の初期水田の関連遺構・遺物が載っている福岡県板付遺跡の報告書はあこがれの存在であり、慶文堂で本書を発見して以降、どうしても欲しくなってしまう。とはいえ、究極の貧乏学生であった私にとっては極めて高価な本、何度か神田通いして逡巡した挙句、38,000円という大枚をはたいて本書を購入した。代金を支払う手が震えていたのを今でも覚えている。

その後はしばらく病にかかったような状態になり、神田通いが続いた。長野県関係では海戸・安源寺、海戸2次、生仁、北原遺跡など立て続けに購入した。海戸・安源寺は6,000円であった。購入の都度、財布の中は電車賃を残す程度になった。当然、生活は困窮を極め、米だけを食べる日が続いたが、神田通いは辞められなかった。

今、これらの本のページをめくってみると赤ペンのアンダーラインや汚い字の書きこみがところどころにみられる。勉強しようという意志は、一応あったようだ。しかし、この努力が研究成果として文章化されることはなかった。当時の私は、研究テーマを絞り込めていなかったため、漠然と全部を読もうと試み、結局は挫折してしまっていたからである。

閑話休題 学生時代のある日、堤 隆氏が私の下宿を訪ねてきた。神田へ行って「原始学序論を買うのだ」という。とりあえず一杯ということになり、結局一晩中飲んでしまい、本を買うお金も使わせてしまった。苦い思い出の一つである。

大学卒業後、私は長野県佐久地方で20年間埋蔵文化財発掘調査技師になることができた。その間、同じ研究目的や価値観をもつ多くの仲間を得る事が出来、その仲間たちから報

告書をいただけるようになった。20年間で私の考古学関係の蔵書は飛躍的に増大した。が、この段階でも寄贈していただいた報告書を活用する機会は少なかった。自分の発掘した遺跡の取りまとめに拘泥してしまい、他地域の報告書をじっくりと読む精神的余裕がなかったためである。おのずと私の研究テーマは佐久地方に限定されたものになった。

高価な報告書を買って漁った若き日の投資、そして他地域の仲間からいただいた多くの発掘調査報告書は、全く無駄であったのか？決してそうではない。

転機が訪れたのは、つい最近のことである。本誌『アルカ通信』に桐原健先生の回顧録が掲載されていた。学友の一人（茨城県の）井上義安氏は「十王台オンリー」とあり、この一文に私は反応した。

「これからは、視野を広げなければいけない。」

今、私は長野県の弥生～古墳時代前期の遺跡動態を把握しようと考え、県内各地域を訪ね歩き、研究者の意見を聞き、遺跡立地のあり方を把握しようとしている。

調査の事前勉強で威力を発揮しているのが、若き日に買い漁った高価な報告書、発掘調査技師時代に仲間からいただいた多くの報告書である。今になって、これらの本を寝床の周りに積み上げ、必死になって読み込んでいる。

県域全体の遺跡動態を観察し、巨視的にとらえることによって新たな歴史事象が見えてきた。将来的には、この取り組みをさらに広い地域に拡大し、板付遺跡の報告書も38,000円に見合った活用をしたいと考えている。

幸いなことに私は何度かの挫折を繰り返しながら、考古学を続けている。私の無意味に本を収集する癖が、この齢になって役立つ奇譚を紹介して、本稿を閉じることにしたい。



アルカ通信 No.144

発行日 2015年9月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp URL : <http://www.aruka.co.jp>